

## その抄録と発表原稿，きちんと書かれていますか？ —第120回学術総会を控えて—

| 河西 千秋 Chiaki Kawanishi

2024年6月に札幌で開催の，第120回日本精神神経学会学術総会の準備に追われている。今回，シンポジウム企画，一般演題ともに演題応募数は過去最高水準で，プログラム確定のために関係者一同，奮闘しているところである。

それはそれとして，予て提起したいと思っていた学術にかかる案件があり，今回の演題査読過程でさらに思いを強くしたのでそのことについて述べたい。日本の精神医学関連学会における「抄録の書き方問題」についてである。著者自身は，精神生物学/社会精神医学双方の研究に従事してきたこともあり多くの抄録査読をしてきたが，特に国内学会では適切に書かれていない抄録が看過できないほど多い。抄録は，論文と同様に背景・目的・対象・方法・結果・考察から構成されるので，それに従って書けばよいことなのだが。

ここでは一般演題に絞るが，まず「背景」は，当該研究実施の動機となった医学/医療，ないしは社会的課題について端的に記述すべきところが，余分な周辺情報ばかり書かれたものや要領を得ないものがあまりに多い。研究の「目的」が定められたならば，どのように対象を選び，どのような方法論によってその目的を果たすのか（あるいは仮説を検証するのか）ということになるのだが，「背景」—「目的」—「対象・方法」に一貫性がないもの，ずれていってしまうものが多い。「結果は当日に供覧する」などと，「結果」を提示していないものもあるが，検証結果のないものをどう査読せよというのか。「当日供覧」と書いて許されるのは，名声が確立された大先生だけと著者は思っている。最後に，たとえ「結果」が示されていたとしても，「考察」は，想像のうえにさらに想像を重ねたようなものが多い。「考察」では，得られた結果から科学的に論考可能なことのみを語るのが基本である。

適切に書かれていないのは本人自身の問題か，指導者の問題か，あるいはその両方ということになるが，今どきの

医学部では，研究のプランニングやデザイン，医学論文の読み方についても教えられているはずだが，学んだことと自身の研究とが頭の中で連結できていないのだろう。また，指導者は指導者で，演題発表の計画から登録までのプロセスを発表者本人に任せっ放しにしているのかもしれない。

著者の所属では，新入職者と大学院生を対象に，早々に診療録の書き方とともに研究抄録などの書き方学習会をしている。基本概念を教え，他者の文書を添削させることで学びを深める。医学/医療上の問題を発見・抽出すること，その由来を推察し仮説を立てること，そしてその検証方法を学び，解決法や介入方略を検討することは，研究以外の他の領域でも大いに役立つことを伝え動機付けをする。埋もれた課題をコツコツ検証し，集めた知見を擦り合わせて太くし，システム化を試み，そして問題解決アプローチを凶るのが私たちに課せられた要務である。精神科ユーザーや社会の保健・福祉の推進に真に役立つために。

あらためて，第120回学術総会の大会テーマを，「真に役立つ精神医学」とした。大会ホームページで，著者は次のように書いた<sup>1)</sup>。「第120回学術総会では，会員が取り組んでいる研究が何を指向しているのか，なぜその研究にこだわりを持ち続けているのか，そして，研究者はその先にもどのような夢を描いているのかということを確認に語っていただきたい」「精神医学における“学術の進歩・発展”を，果たして臨床や地域保健のどこに/どのように着地させ結実させていけばよいのか」。各発表者による，大会テーマを踏まえ，かつ科学的作法に則した卓抜したプレゼンテーションと参加者相互の交流が，近未来のあるべき精神医学の起点になればと願っている。

1) 河西千秋：第120回日本精神神経学会学術総会会長挨拶 (<https://www.c-linkage.co.jp/jspn120/message.html>) (参照 2023-12-08)